



『ベッドサイドの 新生児の診かた 改訂2版』

評者・箕浦 茂樹 国立国際医療センター戸山病院臨床検査部長・産婦人科科長

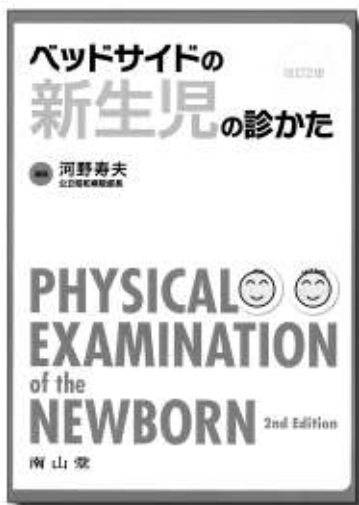
本書は2004年刊行の初版に、新生児医療の変遷に伴って必要な箇所が加筆、改訂されたもので、全体の基本的な構成は初版を踏襲しており、大変読みやすい本である。最近の本の例に漏れずカラフルであることはもちろんのこと、各章の冒頭に要点を箇条書きにまとめてあるのは、読む者にとってポイントをつかむのに非常に役立つ。また正常新生児について詳述してあることは、掲載されている多数の写真とともに、筆者のような産科側の人間にとっても大変役に立つ本である。

本書の特徴の1つは、構成が産科側の周産期医療専門家によ

る胎児診断から始まっていることで、胎児・新生児を連続的にとらえることができ、疾患の理解に役立つとともに、産科・小児科合同カンファレンスなどに際し、共通の理解の上に立ったディスカッションをするための素地を作るのに大変有用である。

産科医や分娩取り扱い施設の減少に対する対策として、分娩施設の集約化が叫ばれているが、一方でアクティブバースやフリースタイル分娩など、分娩に対する妊産婦側の要望も多様化し、助産院もまた正常分娩を取り扱う分娩施設としてその存在意義は大きい。また、院内助産院も徐々に広まりつつあり、助産師のみで分娩を取り扱う機会はこれからますます増加するものと思われる。しかし、分娩においては快適

周産期医療に携わる 助産師に必読の1冊



河野寿夫 編

定価 13650 円 (本体 13000 円 + 税 5 %)

B 5 変型判 / 南山堂 / 2009 年

性とともに安全性が求められるのは言うまでもなく、助産師にもしっかりとした基礎知識と技術の習得が求められる。

分娩監視装置は通常助産師が取り扱うものであり、最初に異変に気づくのは助産師であることもしばしばある。また超音波診断装置も助産師が取り扱うことが可能であり(日本超音波医学会認定の超音波検査士の資格を取るのが望ましい)、産科医とディスカッションするためにもある程度の知識の習得が望ましい。その意味で、本書は第1章を胎児診断と母体合併症の解説に割いているのは有意義である。

続いて正常新生児の章にはいるが、まず分娩室における新生児の観察、次に「日本版新生児蘇生法」(NCPR)について詳述してある。出生直後の蘇生処置はその子の一生を左右する可能性があり、助産師も新生児蘇生法の講習を受け、正しい技術を身につけることが望ましい。さらにその後の退院までの観察、指導についてもわかり易く記載してある。

筆者の勤務する病院では、毎月1回当院スタッフ(産科医、小児科医、助産師、看護師)と地域の開業助産師との連携の会を持っているが、そのような場合も含めて共通の認識でディスカッションを行なうためにも、本書が医師のみならず、病院勤務、開業にかかわらず、助産師諸氏にも広く読まれることを期待するものである。